



新緑がまぶしい夏の森へ。勢いよく広がる枝葉に、木々の生命力を感じられる。一周約7分の散策路。

「いささぎ」の繁る森へ

ごんぎつねが住んでいた

散策路を辿って花のき広場まで行くと、左手に「権狐」の草稿碑があります。「むかし、徳川様が世をお治めになっていられた頃に、中山に、小さなお城があつて、中山様と云うお殿さまが、少しの家来と住んでいられた。その頃、中山から少し離れた山の中に、権狐という狐がいました。権狐は、一人ぼっちの小さな狐で、いささぎのいばい繁った所に、洞を作つて、その中に住んでいました。」文中の『いささぎ』というのはこの地域の方言で、一般的にはヒサカキと言ひ、童話の森にもたくさんあります。実際にキツネはヒサカキの繁るような森を好んで生息します。ヒサカキを見つけて「ごん」の住む洞を想像すると、森の奥へと南吉童話の世界が広がっていきます。



Welcome to the summer forest!

「童話の森」とは？

この森は、新美南吉の代表作『ごんぎつね』冒頭に、かつて中山様というお殿様が住むお城があったと描かれている「中山」の地にあります。新美南吉が作中で書いた植物や生き物が感じられる多様性のある森として楽しめるようにプロジェクチームが活動しています。



ヒサカキは神仏にささげる神の代用品に使われ、春先に独特の匂いの花が咲き黒い実をつけます。

童話の森だより

夏号
2021



森のたんけん隊

ささぶねあそび

クマザサの葉っぱでささぶねをつくろう!

つくりかた

1. 葉っぱの両端を折る
2. 折ったところに切り込みを入れる
3. まん中を残して片方の輪に差し留める

できあがり

せせらぎの小径でささぶね競争をしてみよう!



南吉を読む

『でんでんむし』

新美南吉作

大きな でんでん虫の せなかに うまれたばかりの 小さな でんでん虫が のつていました。小さな 小さな すきとおるような でんでん虫でした。
「ぼうや ぼうや。もう、あさだから、めをだしなさい。」と、大きな でんでん虫が よびました。
「あめは ふつて いないの?」
「ふつて いないよ。」
「かぜは ふいて いないの?」
「ふいて いないよ。」
「ほんとう?」
「ほんとうよ。」 ～後略～



ちいさなごんの贈り物田のあでんでんむしの物語「カフエとジョラ」の贈り物「ごんの贈り物オンライン」にて販売中。



《作品解説》南吉は小鳥や虫など小さくて弱い生き物を好んで物語に描きました。「でんでんむし」もそのひとつ。生まれたばかりの子どものでんでんむしは目にするものすべてが新鮮で、お母さんでんでんむしを質問攻めにします。自然の美しさ、子どもの純粋さ、温かく見守る親の愛情を、まだ19歳の南吉が瑞々しい感覚で書き上げた作品です。

アジサイ

アジサイ科アジサイ属

アジサイは、日本原種のカクアジサイの園芸品種。初夏に色とりどりの花が咲き、次第に花色が変化します。アジサイには毒があるため、よく葉でしかけるでんでん虫はアジサイを食べません。でんでん虫を見つけたらじっくり観察してみてください。



童話の森プロジェクトほか
矢勝川周辺情報を発信中!
ローカルメディア「はんの木」
<https://hannoki.org/>



童話の森 散策マップ

夏号
2021



ビワ
バラ科ビワ属

6月頃にオレンジ色の甘い実をつけるビワ。だえん形の大きな葉が楽器の琵琶に似ていることが名前の由来とされています。今年は豊作の年で、枝がしなるほどたくさんの実をつけました。甘い果実を目当てに野鳥や昆虫が集まり、にぎやかな夏を迎えています。

ビワの葉は昔からお茶や漢方などにも利用され、冬に咲く花は杏仁豆腐のような甘い香りがします。南吉の詩『枇杷の花の祭』では、花の少ない冬にミツバチが集まる様子が描かれています。



ヤマモモ
ヤマモモ科ヤマモモ属

ヤマモモの実シロップやジュースにするとキレイな赤色と爽やかな酸味を楽しめます。毎年7月30日の「南吉さんの日(誕生日)」ではヤマモモジュースが振舞われるのが恒例です。

初夏に赤い実をつけるヤマモモ。とても繊細な実は、少し触れるだけで濃く鮮やかな赤い果汁があふれます。南吉の養家にも大きなヤマモモの木があったので、南吉もこの季節には甘酸っぱいヤマモモを味わっていたことでしょう。

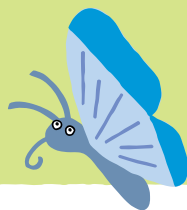


ささぶねをつくる
クマザサはココ!

ごんの洞を
想像してみよう



でんでん虫
いるかな?



しじみちょうと蛍の心温まる交流や、幻想的な夜の風景が印象に残る作品『木の祭』。毎年6月には「南吉さんの虫まつり」を開催しています。

童話の森西側の谷地では、新美南吉作品『木の祭』をテーマに蛍の幼虫の放流などを行っています。「ひとつひとつのほたるがひとつひとつのはなのなかにとまりました。まるで ちいさいちようちんがきにいっぱいともされたようなぐあいでした。(新美南吉『木の祭』より)」夏に白い花を咲かせる木は童話の森にも見られます。どこかでひっそり行われている『木の祭』を想像しながら、夏の森を歩いてみてください。

